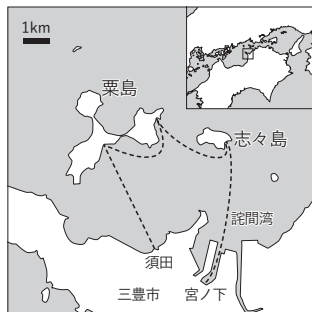


子どもたちとともに地域の魅力発信

田尾 亜希子

―団体名―特定非営利活動法人まちづくり推進隊^{たくま}詫間

―事業名―島の新たな観光シーズ調査事業



―人口減少が進む三豊市の島々―

瀬戸内海に点在する千を越える島の中で、香川県三豊市詫間町沖にある有人島は「粟島」と「志々島」だ。粟島は、三つの島が砂州でつながり、船の錨やプロペラ状に見える。周囲一六キロメートル、人口一五一名の島には、しま山^{じまのやま}100選の城山^{じまのやま}(二二メートル)があり、山頂展望台からは三六〇度。パノラマで絶景の瀬戸内海の多島美を堪能できる。かつて外洋航路で活躍する多

くの人材を送り出してきたが、その背景には、明治三〇年に日本初の海員養成学校として設立された「村立粟島海員補習学校」のちの「国立粟島海員学校」がある。透き通る海を思わせるエメラルドグリーンの洋風校舎は、現在、「粟島海洋記念館(国登録有形文化財)」として島のシンボルとなっている。

その隣にある志々島は、周囲三・八キロメートル、人口二一名の小さな島。春になると花畑が一面に広がり、かつては「花の島」と呼ばれていた。中央

に鎮座する樹齢一二〇〇年以上、幹回り一四メートルの巨大な大楠は、パワースポットとされている。

粟島と志々島へは、三豊市須田港と宮ノ下港から一日八便運航する粟島汽船や、海上タクシーを利用して渡ることがができる。両島の人口は、全盛期に比べると大幅に減少しており、小学校が閉校して以降、子どもをもつ家庭は島を離れて生活するため高齢化や過疎化に歯止めがかからない。

アートに留まらない

島の魅力

粟島では、市の「粟島芸術家村プログラム」事業により、文化芸術による地域活性化や地域住民との人材交流などが行なわれている。作品制作を希望する島外からのボランティアも増えており、定期航路の維持や島の活性化につながっている。二〇一三年からは瀬戸内国際芸術祭（以下、瀬戸芸）の会場となり、回数を重ねるたびに来島者数は伸びてはいるが、トリエンナーレ（三年に一度の開催）で、かつ秋の期間（二ヵ月程度）のみの会場であるため周年での観光には結びついていない。さらに瀬戸芸でアートをめぐる来島者は、滞在時間が短く、粟島の自然や魅力を十分感じているとは言い難い。志々島だとなおさらである。そこで、芸術以外にも島々の魅力を知ってもらい、リピーターを増やすことを目標に、本助成を

活用して島ガイドの養成や観光資源マップを制作する「島の新たな観光シーズ調査事業」に取り組むこととした。

島ガイドの養成と

ガイドマップづくり

本事業では、まず全七回の島ガイド養成講座を実施した。講座には、市内の小学一年生から高校二年生までの児童生徒一五人とその保護者、令和三年から粟島で活動している善通寺^{ぜんつうじ}第一高校、デザイン科の生徒と卒業生の一四名、本法人会員一六名の計四五名が参加した。

講座では、はじめに島の歴史・地名・文化を掘り起こし、観光シーズ（技術やノウハウ、特別な素材や材料）として活用できるかなどの調査を行なった。住民から島での暮らしや歴史を聞き、生業や地名にまつわる話などは、実際にその場所へ足を運んで調べた。

受講生たちは、島をめぐる、地元の方とふれあうなどさまざまな体験を通して、自分たちが伝えたい場所・歴史などを見つけ、話し合いながら、「何度も粟島を訪れ、見て・歩いて・伝えたい」と思う「こは！」というスポットを厳選していった。この結果と来島時間を参加者の体調、帰りの船の時間などを考慮に入れながら自分たちで考案したのが、海洋記念館などを巡る「中心部コース」と漂流郵便局「※」を起点に神社などを巡る「西浜コース」の二つのガイドコースである。

なお、このときに厳選した「観光シーズ」は、粟島四エリア二ヵ所、志々島八ヵ所にのぼった。これを分かりやすく紙面に落としたものが「粟島・志々島ガイドマップ」である。二千部ほど制作し、現在、同マップは島内主要施設

※二〇二二年の瀬戸内国際芸術祭で制作されたアート作品の一つ。全国から宛先不明の手紙を預かり、訪れた人は自由に読むことができる。



粟島・志々島
ガイドマップ

設および定期船乗り場、市観光交流局などで希望者に配布している。

子どもガイドによる 島の魅力発見ツアー

養成講座で設定したガイドコースと、作成したガイドマップを活用し、二回の島ガイド練習会を実施。その後、実際に来島者を案内する「あわしまのええとこガイド」を行なった。このガイド名の名づけ親は、講座に参加した高



西浜コースで栗島神社を案内、案内を受ける人の手にはガイドマップが。

校生である。

ガイドの実施に向け、まず参加者募集のため、各コースのチラシを作成した。チラシには、ガイドとめぐる島の楽しさ、夜の海ほたるの光り輝く様子などが表現されている。これらを市内各所に設置するとともに、SNSや新聞、ラジオなどでもPRしたが、子どもガイドの存在を知らない人も多く、事前の予約にはなかなか結びつかなかった。そこで、ガイドを行なう子どもたちが自発的に、栗島港へ足を運び、来島者などへチラシを配布。その結果、ガイドツアーの申込みは徐々に増えていった。

「あわしまのええとこガイド」は、二



「あわしまのええとこガイド」中心部コースのチラシ。

○二二年の瀬戸芸の秋会期中の土日祝日に計一四回実施し、九七名を案内した。ガイドたちは、講座での経験を活かし、参加者の希望やペースに合わせながら、栗島の魅力を伝えていた。

体験を通じて得た思いを 伝えていく

自身の体験で得たものだからこそ、人に感動を伝えることができる。受講生たちは、最初こそ躊躇していたが、徐々に初めての方々と話すことの楽しさを知り、地域で交流したなかで得た経験や思いを島の魅力として言葉にできるようになっていった。ガイドコースの設定、ガイドマップやチラシの制作など、すべて自分たちで意見を出し合い、決めていったことで、栗島・志々島に主体的に関わっていると感じるようにもなったのではないだろうか。

ガイドを務めた子どもたちは、回を

離島人材育成基金助成事業 事務局より

2022年の瀬戸内国際芸術祭での栗島の来島者数はおよそ15,000人。瀬戸芸ではコンセプトの一つに「民俗・生活」を掲げ、島固有の民俗や生活を活かした地域再生を目指していますが、観光客は作品鑑賞のみに留まることが多く、住民の暮らしに触れる機会は少ない印象を受けます。そんな中、本事業は、来島者に島の魅力ある民俗・生活を踏み込んで伝えるよい事例となったと思います。本財団職員も実際に現地を訪れ、子どもガイドによる案内を受けましたが、手づくりの紹介パネルや島への思いの詰まった説明で、栗島の歴史や暮らしを幅広く知ることができました。

島内に学校がないため、ガイドの児童生徒は全員本土側から参加しています。地元でありながら日常的に触れることの少ない島の暮らしのガイドツアーに、企画段階から参加し、自分たちで観光客を案内した子どもたちにとっても、栗島を知る貴重な経験につながったはずです。ノウハウが蓄積されていくであろう栗島発見ツアーの今後の展開が楽しみです。

田尾 亜希子 (たお あきこ)

兵庫県生まれ。結婚を機に香川県三豊市詫間町に移住。平成24年より住民自らが考え実施していくまちづくり組織「まちづくり推進隊詫間」の事務局として勤務。地域活動支援が円滑に推進できるよう、ボランティア活動会員とともにイベントの企画や開催など尽力中。

重ねるごとに発言や行動に自信をつけていった。子どもたちと一緒に参加した保護者たちも、単なるつき添いに留まらず、一緒にプログラムを作り上げていった。多くの方のさまざまな協力があり、本事業は大きく成長していったと思う。また、島の住民の皆さんも、子どもたちに対し親近感をもって声をかけてくれた。

子どもたちは、自分のガイドを来島者が喜んでくれたことで、さらなる成長につながったようだ。実際に受講生のほとんどが、次回の開催があればぜひ参加したいと言ってくれた。たとえばに参加できなくとも、体験して得た知識や情報は無駄にならない。彼らが成長していく過程で、きつとこの経験が役立つものと信じている。コロナ禍で生活スタイルが一変したが、本事業を通して、人とのつながりやコミュニケーションの大切さが少しでも伝わっていたら幸いだ。この先の未来、島ガ

長につなぐことができた。実際に受講生の子どもたちへ体験したことを伝えてくれることを期待している。

私たちは、栗島を自分のふるさとのように思い、さまざまな活動を通して、魅力を発信し続けている。経験者が新しいメンバーに自身の体験を伝えることが、島の魅力の継承につながる。島のシーズを活かし、関係交流人口の拡大につながるよう、今後も「子どもガイド」の養成を継続していきたい。